

勝利とは見抜くこと

ライアン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ふと思いついたシルヴァリオ　ヴエンデッタのオリキヤラについての短編。  
コンセプトは悪い意味で光にも闇にも成り切らない存在。ただし有能で分相応とい  
う言葉を知っている。そんな感じの男の話。

目

シロウ・暁・アマツ

ムラサメ

次

9 1



# シロウ・暁・アマツ

ここに一人の男の話をしよう。

軍事帝国アドラーに旧日ノ本の姓を受け継ぐ一人の男が居た。

男の名はシロウ・暁・アマツ、軍事帝國の血統派の一門たる暁家の嫡男として生まれ落ちた彼は貴種として何一つ不自由なく周囲より畏敬の念を集めて育つてゆく。

貴方は選ばれた人間なのだという周囲から煽てられ育つた彼の自尊心は当然のように肥大していき——性質が悪いことにというべきかながちただの思い上がりだと言えないだけの才覚をその男は有していた。新西暦に於いてアマツの血を引く者はまるで天に愛されているかのように才に満ちている。そして貴種故に市井に於いてはまづ受ける事が出来ない高度な教育を施される事でその実力は凡夫を歯牙にもかけない領域へと達して行く。そして周囲はそんな家の若君を「これで当家は安泰です」と言わんばかりに持て囃す。当然のように自尊心は肥大していく。

そうして思い上がった才子の鼻は意氣揚々と門をくぐつたアドラーに於ける登竜門たる士官学校で真の傑物に出会つた事で呆気なくへし折られる事となる。

へし折つた男の名はギルベルト・ハーヴエス、座学実技、あらゆる分野に於いてシロ

ウの上をいつた目が眩むばかりに優秀な男だつた。自分は次席でギルベルトが首席、それはシロウが人生で初めて味わう事となつた敗北の味わいであつた。

そして男はその敗北を受け容れた。「なるほど、世の中上には上が居るということか」と、謙虚な心持ちとなつたのだ。何故ならば嫉妬するにはギルベルトは余りにも完璧過ぎたから。ギルベルトに負けじと彼以上の努力を重ねるといった、そんな割に合わないことはしない。

何故ならば彼は生まれついての勝者<sup>アマツ</sup>であつたから。自らの人生に栄光が約束されているというのにどうして自らの身を削るかのような行いをしなければならないのか？と。自分の才覚というものにある種の見切りをつけたのだ。

シロウの姿が呼吸するかのように努力をして自らを高める事を惜しまないギルベルトからすれば不可解だつたのだろう。

ある時彼は問いかけた「君の才覚ならばより高みを目指せるはずだ。なのにどうしてその程度で甘んじているんだい？」と。

そんなギルベルトにシロウは冷笑して答えた「割に合わないからだよ」と。そう全く以て割に合わない事ではないか。我が身を削り高めて仮にギルベルトを追い越したとしよう？

しかし、その先は何が待つている？軍事帝国アドラーの頂点たる総統職を巡る果てな

き権力闘争だ。

自分は確かに生まれつき優位な位置に居るだろうが、しかし世の中上には上が居るという事を思い知つたばかりではないか。

確かに暁家は歴としたアマツだが、それでも頂点に君臨するというわけではない。文の名門たる漣、武の名門たる朧を筆頭に暁以上のアマツというものはいくらでも存在する。

そして頂点に立つたならばそれで終わりではない。権力を手に入れた権力者に次に待つのは権力を維持するための戦いだ。

そうして我が身をすり減らして、一門の人間のために尽くす？全く以て馬鹿馬鹿しい事ではないか。

何故自分がそんな苦労を背負い込まなければならぬのか——と。

無論、だからといって全く努力をしなくなつたわけではない。

賢者は歴史から学び、愚者は経験から学ぶという言葉があるがこの論法に則れば彼は紛れもない賢者であつた。

ただしその知恵を誰かの為に用いるのではなく、あくまで自らの為にのみ用いる至つて自分本位な賢者であつたが。

驕れる者は久しからず、腐敗した権力層が刷新されるというのはこれまでの旧暦の頃

より幾らでも溢れかえつてゐる出来事だ。

そしてその時代がいずれ訪れるであろう事を彼は予見した。

何故ならばギルベルト・ハーヴエスという傑物が今のアドラーに対する憤りを抱いているのだから。

無論如何に傑物と言えど、彼一人ではどうにもならないだろう。

しかし、今の世を憂いでいる奇特性アマツが少なくとも二家アドラーには存在している事を彼は知っていた。

漣と朧、高貴なる者の義務の務めだとかいう綺麗事を馬鹿真面目に信望してゐるこの両家とギルベルト・ハーヴエスが結びつけば歴史で幾度も繰り返された政変——それが自らの代で起きない保証はなかつた。

故に重要なのは自らが勝者と成ることではなく、誰が勝者となるかを見極めること。

そして一度、誰が勝つかの確信を得たら勝敗が決してしない内にその人物に全靈をもつてすり寄る事だ。

そのために重要なのはそれを決めるまでは片方側に入れ込み過ぎない事だと決めて、彼はその優れた才を自己のためのみに使い続けながら、情勢を注視し続ける。

そうして新西暦1022年、ついに彼が抱いていた懸念は顕在化する。

スマム出身者として血統派により冷遇されていた東部戦線の英雄クリストファー・

ヴァルゼライドを被験としたエスペラント技術の発見。そして軍部内に存在した改革派の勃興。

これによつて血統派一強と言つて良い状態であつた軍内の派閥抗争が一挙に激化したのだ。

そうしてそれから一年間。彼はこの彗星の如く現れたヴァルゼライドという男を観察し続ける。

いくらエスペラント技術という新技術を発見したと言つても長きに渡つて帝国に君臨し続けた血統派の力は絶大。早とちりをして大船から泥舟に乗り換えてしまつては愚かにも程があるだろうと。

そしてシロウ・暁・アマツは結論を下した。アレは紛れもない英雄かいゆうだと。歴史において極々稀に現れる不可能を可能にしてしまう超人なのだと。

そうクリストファー・ヴァルゼライドこそ紛れもない勝者となる存在だと悟つたが故に——自らの身を守るためにシロウは速やかに行動する。

勝ち馬に乗る行為は趨勢が決してしまつてからでは遅い。未だ状況が拮抗しているという状況の時に味方してこそ意味があるのであるのだから。

無論ヴァルゼライドが敗北してしまつて可能性もあるだろう。しかし、その場合でもアマツたるシロウは命まで奪われる心配は薄い。

対してこのまま静観した状態でヴァルゼライドが勝利してしまえば、シロウは実家毎肅清の憂き目に合うだろう。

しかし、今ならばまだ間に合うのだ。

さもヴァルゼライドと出会った事で目が覚めて軍属としての使命を思い出したと良い子ちゃん面して見せれば良い。

無論、あの英雄かいけいはそんな演技で騙せるほど甘い存在ではないだろう。

されどクリストファー・ヴァルゼライドという男はどうやら自分のためではなく眞實心の底より國のため、民のために戦いそのためなら私情を押し殺す事が出来る傑物異常者だという確信を一年に及ぶ観察でシロウを得ていた。

ならばこそ、ヴァルゼライドは決して自分を無碍には出来ない。例えそれが演技であると彼が見抜いていようと、それはあくまで彼の中にのみ存在する確信だ。

前非を悔いて自身への忠誠を誓うと口にした者まで処断してはそれこそが國が回らなくなるという事をあの男が理解しないはずもない——そんな確信をシロウは抱いていた。

「中佐の祖国への尽力を目の当たりにして小官は自らの不明を悟りました。どうか今後は中佐の下で働く事によつてその罪を雪がせて頂きたく」

シロウ・暁・アマツにはアマツとしての信念や誇りなど無い。故に卑賤なスラムの成

り上がりに對して頭を下げるという他の血統派の面々であれば決して出来ぬ屈辱的なことも平然と行う事が出来る。まず第一に生き残らねば何にもならぬのだから。「父上、母上。私は自らの不明を悟りました。ヴァルゼラード殿こそこれからのアドラーを担う存在です。我ら暁家、今こそあの方の下で国を担う貴種としての眞の使命を果たそうではありますか」

されど人としての情が全く無いというわけではない。

だからこそ家族が破滅するのをある程度までは避けようと努力した。

「父上、母上……あなた方は間違っています！例え父上と母上と違える事になろうとも私は自らの使命を果たしましよう！それこそが誇りある暁の人間のなす事だと信じるが故に」

しかし、何がなんでも助けようとする——そんな割に合わない事はしない。

何故ならばこの世に自分以上に大切な存在はありはせず、家族だると友人だると恋人だると妻だると我が子だると自分を犠牲にしてまで救おうなどとそんなのは全く以て割に合わないことなのだから。

故に彼はあつさりと自らを愛してくれた家族、思いとどまってくれと泣いてすがる両親、そして妻を捨てる。こいつらは駄目だと。

くだらないものに囚われて現実が見えていない愚か者だと内心の侮蔑と共に己が家

族に見切りをつける。

(妻はまた娶ればいいし、子もまた作ればいい)

何故ならばシロウ・暁・アマツには容姿も才覚も地位も十二分に揃っているのだから。それこそ女など手に入れようと思えば幾らでも手に入るのだ。

ああ、哀れるかな我が妻よ。わが子よ。お前たちが自分へと付いていなければ自分は夫として父としての責務を果たしてやつたというのに。

残念だが仕方があるまい。私を信じなかつたお前たちが悪いのだと、少しばかり哀悼の意を捧げ、完全に彼は見切りをつける。

そして英雄に出会い目覚めた愛国の士という仮面を被つてから四年後の新西暦1027年、シロウ・暁・アマツは自らの目が正しかつたことを証明する。

後にアスクレピオスの大虐殺と謳われる事となつたこの悲劇で軍部血統派は事実上壊滅。

救国の英雄クリストファー・ヴァルゼライドは国民からの熱狂的な支持と共に軍事帝国アドラーの第37代總統へと就任、シロウもまた早くにヴァルゼライドへと忠誠を誓つた忠臣としてその功績と才に相応しい地位へと就くのであつた……

# ムラサメ

私の名前はシロウ・暁・アマツ。

軍事帝国アドラーの名門暁家の新当主にして帝国軍中将にして統帥本部次長を務める相応に優秀な男だ。最も今や前者の肩書というものは然程意味を持たないものになつたが、まあ兎にも角にもそこらの凡愚とは比較にならぬ存在だと認識してくれればそれでいい。最も本物の怪物達には遠く及ばぬ程度のではあるがね。

さて無知な者であつても私の中将という階級から相応の高官であることは理解しただろう。しかし、同時に統帥本部次長という役職とは何ぞや?と思つたものも居るだろう。無敵の帝国軍を構成しているのは天に輝く十二の星座たる黄道<sup>ヨウゾウ</sup>十一星座部隊<sup>ディック</sup>アッカリ、そのような名前の組織は聞いたことはないと。まあそれも無理からぬことではあるだろう、何せ統帥本部に勤務できる者は軍の中核を担うことを期待された私のような士官学校を優等な成績で卒業したトップエリートばかり。例え驚異の人間兵器の資質がある者だろうとも無知な阿呆では生涯勤務する事はない場所なのだから。端的に言えば、統帥本部とは帝国軍の最高作戦機関だ。国防方針の選定、侵攻計画の

策定、作戦計画の立案、兵站の管理——そうした腕っぷしが立つだけの馬鹿では決して出来ぬ帝国軍の頭脳が集う場所だ。士官学校を優等な成績で卒業した者は基本的に比較的安全な西部辺りで数年前線勤務の経験を積んでから此処に配属される事となる。——私の代の首席は何とも奇特なことに激戦区たる東部戦線を志望したが、まあこれはある種の例外と言つていいだろう。アレは眞実本気で公正な社会を築こうとしていた傑物であつたが故に。例証には甚だ不適な男だ。

話を戻すとしよう私はそんな帝国軍の中核における次長——すなわちNO2の座へと就いている。

頂点たる総長を務めているのは我らアドラーの偉大なる英雄たる麗しの總統閣下であり、私の上司は總統閣下のみであると説明すれば一體私の地位がどれほど高位かわかつて貰えるだろうか？ そう実戦部隊こそ掌握していないものの私の地位は決してゾディアックの隊長達に劣るわけではない。むしろある種上位に居ると言つても過言ではないだろう。何せこちらは監査役を送る側であり、向こうは送られる側なのだから。

いつの世も前線で戦っている部隊が軍閥化して中央の統制を離れるというのは為政者にとつての悪夢だ。だからといってそれを警戒してほいほいと部隊のトップを変え居てはそのまま敵に付け入る隙を与える事になる。ではどうすればいいか？ 簡単なことだと指揮官の補佐役を中央の息がかかつたものにすればいい。

どれほど優秀であろうと人間単騎で出来ることというのはたかが知れている。數十人程度の規模ならばともかく一軍辺り数万を超える規模となるゾディアックの隊長ともなれば、自身の手足となつて働く者のみなら自分の耳となり目となり情報を収集し、分析し、補佐するものがどうしたつて必要不可欠であり、当然ながらそれが務まるのは士官学校で高度な教育を受けた者だけだ。参謀と呼ばれる部隊の頭脳——それを個々人の適性を考慮して各部隊へと配属するのもまた統帥本部の役目だ。これはある種特殊な立ち位置にある特務部隊裁劍天秤<sup>ライブラン</sup>であろうと例外ではないのだ。

その気になればいくらでも甘い汁を吸える美味しい地位ではあるのだが、残念ながら当面の間は眞面目に職務に精励する以外にないだろう。何せ我が上司は滅私奉公を繪にかいたような英雄であり、臆面もなく「この身はみなを幸福にするためにある」などと宣言できてしまう異常者なのだから。国家に対する有益性というものを私は示し続けなければならないのだ。……正直、かなり息苦しくはあるがまあやむえないだろう。人間とは社会と折り合いをつけることなくして生きてはいけぬ代物なのだから。せいぜい今<sup>英雄</sup>の世を生きるのに適した<sup>信者</sup>仮面<sup>者</sup>を被つて上手く立ち回るとしよう。

——そう、時代は変わつたのだ。

アマツ<sup>アマツ</sup>というだけで尊ばれる時代は終わり、今やそうした血統や縁故を抜きにした個人としての価値というものを示さなければならぬ時代。

なればこそ血縁だからという理由のみで罪人を庇うような行為は自分の首を絞める結果にしかならず

「お呼び出しに従い、クロウ・ムラサメ参上致しました」

「ああ、よく来てくれたね」

重要機密の国外持ち出し等を図ろうとしている親類等もはや私にとつては百害あって一利なしの害悪でしかないので。

・・・

クロウ・ムラサメ……それはかつてシロウ・暁・アマツが最も重用した宝剣の名であつた。

何せその実力は文句なしの最高峰。こと剣技に於いて彼を上回る実力者というのはまず存在しえなかつた。

そして実力よりも何よりもシロウが重宝したのはその人格だつた。クロウ・ムラサメという男は自身が主の道具足ることを自らに課し、そらにはそれを誇りに思う筋金入りの“ムラサメ”であつたのだ。

なればこそシロウ・暁・アマツは実家を飛び出す際に多大な労苦を果たしてまでこの男を引き抜いたのだから。それはシロウにとつて十二分に払つた労苦に釣り合うだけのリターンが得られる割に合う苦労のはずであつた。

何せクロウ・ムラサメはシロウ・暁・アマツが知る限り文句なしに最強の男であつたが故に。

この上驚異の人間兵器たるエスペラントになれば、それは間違いなくシロウ・暁・アマツにとつて最強の剣となるはずであつた——そう見込んでいた。

しかし、そんなシロウの思惑は崩れ去る。なんとクロウ・ムラサメは次世代の主力兵器たる資格を有していなかつたのだ。

これはシロウをして完全に想定外であつた。何せアマツ血統の者はエスペラントとして高い適正を有しているものばかり。ムラサメが分家筋とはいえ、順当にいけばエスペラントになるものだとシロウは踏んでいたのだが——甚だ残念なことに彼はその資格を有していなかつたのだ。

シロウにしてみれば完全なる計算外であつた。

卓越した剣技を誇る彼がエスペラントという超人と化せばそれはまさしく究極の剣。加えてまず裏切らないと信用も出来るとなればこれほど重宝することはない。

この世に於いて最も大切な自分の身を守る道具としてこの上ない物となるはずだったのだが——蓋を開けてみれば慮外の事態。  
実家から苦労して持ち出した最強の断刃ムラサメとなる存在は時代遅れの骨董品と化してしまつたのだからさすがにこれは笑うしかない。

だがしかし、それでも彼は中々に有用であつた。

エスペラントなぞ何するものぞと言わんばかりに血統派と改革派の抗争の真つただ中に於いてシロウの敵を討ち果たし大いに役立ってくれた。

かのアストレアのお気に入りからもその実力を高く評価されたようで、ちよくちよく向こうから貸し出しの依頼がかかり、裁劍天秤<sup>ライブラン</sup>とのコネクションを深めるのになかなかに役立ってくれた。

故にシロウ・暁・アマツの彼への評価はそこまで低くない。まあ期待は外れたが、苦労に見合う程度には働いてくれた無ければ無いで別段構わないが、あるに越したことはないそこそこ有用な道具。

そんな程度の認識だ。

「以上が今回の貴官の任務となる。帝国最大機密たるエスペラント技術の持ち出し、これは国益の観点から何としても阻止せねばならん。残酷なようだが一人であろうと逃がすな。それが例え子供であろうとだ」

だからこそこうして汚れ仕事を任せせる。

何せエスペラントでない彼では護衛というどうしたつて後手を踏む立場には向いてない。

いざというときにその身を挺しても自分を守る献身さという点では申し分ないが、

生身である彼ではそこで終わってしまうのだから。ならばこそ研ぎ澄まされた刃は守りよりも攻撃に用いるに限る。

そしてそれを向ける対象が奏の家というシロウ・暁・アマツの実母の生家であろうと彼には躊躇いなど存在しない。むしろ親類なればこそ、クロウ・ムラサメというそれなりに重用している手札を送ることで自身の清廉さをシロウは周囲に示さなければならないのだ。

なぜならばシロウ・暁・アマツは英雄と出会ったことで目覚めた愛国の士にして忠臣なのだから。多少血が繋がっているだけの他人を切り捨てることで自身の立場の強化に繋がるのならば喜んでするというものだ。

計画の扱い手足る商国のホライゾンなる商人は相応に優秀だったのだろう、この段階まで計画を隠していたのだから。

だが哀しいかな、相手が悪かつた。英雄閣下の魔性とでも称すべき魅力を見誤つていた。

万が一にも裏切ることはないと信じていた古くから奏の家に仕えていた従者、それが主君の企みを知らせて來たのだ。

保身のためではない、偏にクリストファー・ヴァルゼライドという男のあまりにもまばゆい輝きに目を焼かれ、自分も私心を殺し国家に尽くさねばならぬとそんな呪いじみ

た思いに駆られて。

——あるいはそう見せかけているだけの自分の同類かとも思ったのだが、どうにもそういうわけではなくそれが真実なのだから相手にしてみれば悪夢としか言いようがないだろう。

だがまあそんな事情はシロウにとつてみればどうでも良いことであった。

シロウ・暁・アマツにとつて大事なのはそれによつて如何にして自らが利益を手に入れられるか？あるいは手に入れるにはどのように立ち回れば良いのかというその点に尽きるのだから。

そしてその答えがこれであつた。ムラサメという相応に自分が重宝していると評判の道具を送る事でより自身の仮面を強固なものにする。私心なく国家のためとあれば例え親類であろうと斬り捨てるという姿勢を示すわけだ。

その上で冷酷だという印象を与えぬようにもう一段の断腸の思いで行つたようにでも演じて見せればいい。

叔父と義叔母、そして従妹のために相応に立派な墓を立ててやり、涙の一つでも流しながら墓前で「すまない、だがこれも祖国のためだつたんだ。許してくれとはいわん、だがどうかわかってくれ」とでも言えばまあ十分だろう。多少懐は痛むが、それは必要経費というものだ。

「さようなら、ナギサ・奏・アマツ。君は悪くはなかつたが君のご両親がいけないのだよ。まあ子は親を選べないものだからな、悪いがあきらめてくれたまえ」

自業自得とは言い難い従妹の少女。

それに対してもほんの少しだけ哀悼をシロウ・暁。アマツは捧げる。

そしてそれつきり。愛らしい笑顔を浮かべていた、決して嫌いではなかつた従妹の存在を過去のものへと変える。  
相応に有用だと思つていた自らの道具にとうの昔に致命的な亀裂が入つていたと気づかぬままに……